# 于臣『渋沢栄一と＜義利＞思想――近代東アジアの実業と教育』

髙　野　暁　子

## 1　はじめに

本書は2006年３月に東京大学大学院教育学研究科に提出された博士学位請求論文「渋沢栄一の〈義利〉観をめぐる実業と教育の一側面――張謇との比較を中心に」を基としている。

「義」とは「道義、正義の倫理規範のこと」（５頁）、「利」とは「功利、物質的利益、ことに私利を指している」（５頁）という。いずれも儒学の主要概念であり、とりわけ経済思想の中核として位置づけられるものである。西洋文明が流入し、経済的近代化が起こる以前、東アジアの儒学文化圏では「義」を重んじ「利」を軽視するいわゆる「重義軽利」が基本的認識となっていた。その考えによれば、利益を追求する経済活動は最小限に留められることになり、担い手である商工業者は蔑視の対象となる。こうした点からすれば「重義軽利」は経済的近代化とは相容れない、むしろ真っ向から対立する思想として理解することが可能となるのである。

にもかかわらず儒学文化圏に属する国々はめざましい経済発展を成し遂げた。これは何故なのだろうか。儒学はそのことに積極的に関わっているのか、関わっているとすればそれはどのような形でなされたのか、そうしたことが問いとして立てられることになる。

著者の関心もこうした流れの中からわき上がったものである。そこで目指されているのは、「東アジアにおける経済的近代化と儒学の関係を明らかにすること」（27頁）に他ならない。そこで著者は「日本の近代化の中心的人物とみなされ、かつ自覚的に儒教にかかわる発言を続けた人物」（８頁）として渋沢栄一を取り上げ、彼の「一生を貫いた最重要課題」（18頁）である〈義利〉観にせまっていくのである。

渋沢栄一（1840～1931）は、日本が経済的近代化を遂げようとしたまさにその時期活躍した実業家の一人である。彼の行ってきた活動は起業から慈善事業にいたるまで実に幅広いものであり、いずれも日本社会に多大な影響を及ぼしたとされる。従来の渋沢論も彼の先駆的指導者としての側面に焦点を当て、彼を「日本資本主義の父」と位置づけている。また、彼と儒学との関わりも時に指摘されるところであり、彼の『論語』解釈などに関心が集まりつつある。著者が渋沢に光を当てるのも、こうした渋沢評を踏まえた上のことであろう。本書のように日本の近代化の内に儒学の存在を認めていく立場は、同じく日本の近代化を儒学の解体、もしくは離陸に見る歴史研究[1)]とは鮮やかな対比をなしており、非常に興味深い。

では、上述のように意味づけられ把握された渋沢に対して著者はいかなる態度で向き合おうとするのか。繰り返し主張されるのは、「時代の児」としての渋沢の姿である。そこでは個人の理念と当時の社会環境及び政治行為とを分離するかのような従来のものの見方が批判され、むしろ渋沢が時代をどのように受け止め、その中でいかなる活動を行ったのかという両者の連関が重視される。したがって著者は、渋沢自身の生涯や思想・行動の展開のみに目を向けるわけではなく、また西洋文明が流入した当時の政治社会状況に重きを置くこともしない。これら二つを射程におさめ、その動きを見据えながら渋沢の〈義利〉観を考察するのである。それは、時代のうねりに巻き込まれつつその中で奔走していく一人物を浮かび上がらせることでもある。我々読者は、まさに近代化へと歩みを進めようとする日本の「時代の児」のありようを見ることになるだろう。

こうした視点から描き出される事柄は多岐に渡る。以下では評者の関心に基づきながら、本書の内容にせまってみたい。

## 2　『論語』の読み直し

著者は、渋沢の〈義利〉観を考察するにあたり、まず学問・思想の面から作業を進める。そこで注目されるのが、『論語』と渋沢の関わりである。渋沢は

儒学の中でもとりわけ『論語』を座右の書とし、その強い影響下にあった。晩年彼が『論語と算盤』『論語講義』など『論語』に関する出版物を刊行していることから明らかなように、その思想的傾倒は一定の整合性を持ち、系統立てられた形でなされていたという。著者が〈義利〉観の探究に渋沢の孔子学を取り上げるのも、以上のことを意識した故であると言えるだろう。重要なのは、その『論語』がどう読まれたかということである。

儒学の始祖孔子は、「君子義ニ於テ喩リ、小人利ニ於テ喩リ」というように「義」と「利」を分け、それぞれに君子と小人を当てはめるような言説を残している。後世、孔子の思想を継承した人々は両者の軽重をより徹底させる形でかくのごとき説を展開していった。そしてその傾向は、朱子学を中心とする江戸時代の思想にも少なからず影響を与えたのである。

著者は、渋沢がこうした江戸時代の「重義軽利」に批判の目を向けていたという点に注意を促す。渋沢によれば、孔孟の教えにある仁義道徳と利用厚生とは二分されるものではなかった。ところが後の学派、主に朱子学が両者を引き離して論を進めてしまい、まさにそのような事態によって儒学の価値が貶められたのだという。彼にとって「重義軽利」は後世の学者が孔子を誤って理解した結果に過ぎない。したがってこの誤りをただし、孔子の教えを元の主旨に引き戻す必要があった。そこで彼によって提唱されたのが「義利両全説」である。「義」と「利」いずれをも成就させること、すなわち仁義道徳と利用厚生とを両立可能なものとし、その方向性を明らかにすること、これが彼の立場であった。かくして孔子の教えは「義利両全説」に基づいて再解釈されていく。『論語』は富、あるいは利益の肯定という視点から読まれるのである。

こうした渋沢の儒学受容及びその展開については、体系性の希薄さを指摘するものもあれば[2]、「孔子に帰る」という点において正統な儒学の枠からはずれるものではないという評価[3]も見られる。長きにわたる儒学の歴史に渋沢がどう位置づくのか、これは容易には判断を下せない大きな問題であるだろう。著者は渋沢が彼の周囲に支配的であった儒学、すなわち朱子学や江戸時代の学問制度を退け、実情に合った新たな『論語』読みを展開していく手法に彼の独自性と意義を見出している。著者によれば、渋沢は学者の研究のように考証学的に『論語』を読むのではなく、孔子の言をその時代に適応させ、それが困難な場合には語句を取捨選択するという方法を自覚的に行っていたという。渋沢にとっての時代とは、まさに経済的近代化が実現されるべき過渡期に他ならない。かかる点において著者は渋沢の実用主義・断章主義を評価するのである。それは渋沢の〈義利〉観が経済的近代化における儒学の可能性を開いたことの証明でもあった。

農業が最も重要な産業であった時代に発祥した儒学は、それ自体に農本主義的経済観を含んでいた。こうした儒学の思想は一見すると近代の資本主義になじまないかのようである。しかしながら渋沢は『論語』が資本主義経済においても実用可能であることを示してみせた。彼の孔子学を通して、近代化に適応する思想としての儒学が確認できるのである。著者は言う。「実業家の〈義利〉観が儒学にどのような可能性を提供したかという、儒学そのものの見直しを行いたい」(26頁)。「義利両全説」は著者にとって儒学が有する可能性を、思想的な面から開くものに他ならない。

### 3 「義利両全」の実践

渋沢は『論語』の読み直しを通して「義利両全」を唱えたのであるが、それでは「義」と「利」の両立はいかにして可能なのだろうか。著者は渋沢の「公利」「公益」概念を持ち出して解説する。渋沢は富の追求に関して、それが己の利益になることを認めつつもそれに偏することをよしとせず、むしろ「義」に従い「公利」の実現につながるような活動を奨励していたという。渋沢にとって「利」とは単なる自己一身の利益のことではなく、「義」と同レベルで語られる「公利」をも意味していた。主張されるのは、「私利」を「公利」「公益」に一致させること、すなわち「公利」「公益」となる程の「私利」を常に求めていくことなのである。ここにおいて「義」と「利」は一つながりのものとなる。渋沢は「義」を「公利」「公益」の枠組みの中で捉え、それを富の目標に掲げることによって「義利両全」を達成しようとしたのである。

なお、著者は渋沢の「公利」「公益」が国家の進歩発展を意味することに注意を促している。渋沢が語る富の追求とは、国を経済的に豊かにすること、富

国を狙ったものなのである。渋沢の国家志向は夙に指摘されるところだが、著者もまた彼の〈義利〉観に国家への強い意識を読み取り、それを商工業立国主義の観点から捉えている。著者によれば、渋沢の「義利両全説」に窺われる「公利」「公益」論及び国家観はまずこの商工業立国に対する思想を前提にして理解すべきであるという。彼が『論語』の読み直しを行い、利益追求の重要性を説いたのは、日本を商工業立国にするという大きな目標を成し遂げようとしたからである。

こうしたことから著者は渋沢の具体的な活動に焦点を当てていく。そもそも儒学は一部の考証学を中心とする学派を除けば書物上の知識獲得や観念論的議論のみに価値を置くことはあまりなく、むしろその知識がいかに実践されるかという点にも関心がむけられる。それは渋沢についても言えることであり、彼は実用の面から『論語』を解釈する手法をとっていた。著者はこうした渋沢の実用主義を踏まえ、様々な活動群の中に彼の儒学思想を探るのである。ここに実学重視の儒学の特徴、及びそれを継承する渋沢の姿勢を汲み取ろうとする著者の配慮を窺うことができる。本書では合本組織による第一国立銀行の創立・経営や、様々な企業を起こして経済の活性化を企図する渋沢の「よろずや」としての側面などが〈義利〉観に基づいて捉え直される。これらはいずれも富国の担い手である商工業者に働きかけ、新たな世界を創り出していく指導者渋沢栄一の姿に他ならない。ここに「時代の児」を描き出そうとする著者の意図を見ることができる。

著者はこのように経済人渋沢の特徴を明らかにするのだが、力点はむしろ経営以外のところに存していた。渋沢の〈義利〉観から思想・行動を読み解いていく著者の立場からすると、視点を彼の経営理念に置くだけでは不十分であるという。重要なのは、「自己の利益、つまり私利を求める人間はどのようにして『公利』を処理すべきなのだろうか」(112頁)という問いに対して指導者渋沢がいかなる実践をもって答えるかということである。著者はそこで、渋沢が富豪の救済活動に期待をよせていた事実に触れる。渋沢は商工業の発展に伴った社会問題を念頭にしつつその解決を計ることで、私利と「公利」の調和が保たれると考えていた。自らの商工業立国理念がもたらした社会の負の側面（窮貧民・孤児・棄児の出現など）を自らの手で処理すること、これが「義利両全」の実際におけるありようなのである。それはまさに時代を見据え、対応していく「時代の児」としての活動だと言える。

では、いかなる具体例の内に「義利両全」が垣間見えるというのだろうか。本書では、渋沢の慈善主義が検討される。著者にとって慈善は「義」の領域に他ならず、したがって経済人渋沢がそれをどのように行っていたのかが、「義」と「利」の調和の解明に深く関わるのである。渋沢は公的救貧施設東京養育院の院長を務めるなど、多数の慈善事業に携わっていた。著者によれば、渋沢の慈善活動から窺える基本理念には二つの特質があるという。すなわち孔孟の学に基づいた仁の実践という道徳的側面と、貧窮によって生じてくる社会の害悪を制止し国家の安定を確保するという社会経済的側面である。渋沢における慈善とは、孔子の教えに導かれたものであり、国家への働きかけを意味する点においてまさに経済人による「義」の実現であった。このように著者は、渋沢の慈善思想の中に儒学の影響を読み取っている。私的利益を追求する者が己の力で国家の安定に寄与する慈善事業こそ、「義」と「利」の調和を証するものとして把握されるのである。

ここで著者が儒学の〈義利〉観に基づいた慈善思想を持ち出したのは非常に興味深いことである。渋沢の慈善は、日本の慈善全体における儒学の影響を問う試みとして改めて検討される必要があるように思われる。当時行われた慈善事業の中で渋沢のそれはいかなる特質を持っていたのか。そこに経済人らしさはあったのだろうか。また、当時活躍していた他の慈善家、例えば石井十次や留岡幸助らの思想と比較した場合、〈義利〉観としての独自性は浮かび上がるのだろうか。さらに注目されるのは、渋沢の子ども観についてである。渋沢は早い時期から養育院の子ども達を大人から引き離して彼らとは異なる扱いをするよう主張していたという[4]。ここに子どもを特別視する渋沢の態度が窺えるのだが、かかる考えは彼の〈義利〉観から導き出されたものなのだろうか。儒学における子ども観の問題も含めてさらに検討する余地があるように思われる。

## 4　教育における二つの「義」

著者は渋沢の活動の中でもとりわけ教育への関与に注目している。渋沢の〈義利〉観を議論の基軸に

する本書にとって教育は重要な問題の一つであった。何故なら渋沢の教育活動は、彼独自の〈義利〉観に基づいたものであり、したがって教育に対する尽力と発言を検討することは彼の〈義利〉観の解明につながっていくからである。著者はここで、上述した慈善思想の場合と同様に渋沢の行動自体から〈義利〉観を見出し、その軌跡を追うことにしている。教育活動においてもまた「時代の児」渋沢の立場が浮き彫りにされるのである。

では、著者は当時の教育に対する渋沢の認識及び応答をいかなるものとして描き出すのか。渋沢が本格的に商業教育に関わったのは、森有礼によって設立された商業講習所の経営委員に就任した時だとされている。当初森の私塾であった講習所は後に東京会議所の所管となり、当時会頭を務めていた渋沢がそれに携わるようになったのである。だが既に指摘されているように、渋沢は始めから商業教育に情熱を傾けていたわけではなかった。むしろ講習所の設立には疑問を感じていたようである。そんな渋沢ではあったが、後に府庁内で講習所撤廃の話が持ち上がった時にはその存続を企図して奔走するなど、次第に積極性を表わしていく。これは何故なのだろうか。著者は渋沢の教育への開眼から思想そのものの変遷までを丹念に跡付けている。

著者によれば、渋沢は当時の学界に対して大いなる不満を抱いていたという。それは政治学・法律学重視の官位志向と、商業教育軽視の賤商意識である。当時学問を志す者の多くは官僚もしくは教員になることを理想とし、制度的にもそうした人々を養成する学校が尊ばれ、重視される傾向にあった。それに対し、商業教育は商法講習所が撤廃の危機にさらされるなど、社会的地位は低かったと言える。渋沢はそれを官尊民卑・商業蔑視と見なし、かかる状況を打開するため商業教育の振興を自らの課題とするようになったという。渋沢を教育活動に駆り立てたのは、商業界に対する差別及び蔑視の風潮だったのである。ここに商業界の改革を目指す指導者渋沢の様相が描き出されている。教育の領域においても渋沢はあくまで経済人であり、世間を見据えて立ち向かう「時代の児」なのである。

なお、本書ではあまり触れられてないが、この商法講習所は東京府の所轄になってから数度、経費削減を理由に存続の危機に立たされ、その度に渋沢は民間有志から寄付金を募り、自らも私財を投じていたという[5]。渋沢の尽力によって東京府から農商務省、そして後には文部省の管轄となり「官立」としての性質を持つ商法講習所がその維持に際して複数の民間人による経済的援助に頼っていたことは、注目に値する。有志者による募金という形態は、例えば一家の財によって運営される一家塾とは趣を異にしており、しかも渋沢自身が自らのやり方を一家塾とは区別される「公共的性質」を帯びたものだと認識していた。ここに、「公立」学校に対する新たな視座がはらまれているように思われる。かかる渋沢の行為は、日本の「公」教育についての再考を促すものになりうると目される。

さて、見てきたように著者は渋沢の商業教育志向の背景に、当時の学界に対する批判とその変革を目指す経済界の指導者、「時代の児」としての側面を認めるのであるが、それではこうして動機づけられた渋沢の活動は、後にどのように展開していくのだろうか。本書では、高等商業学校（高商）の大学昇格をめぐる彼の発言を追うことによって、思想の変遷を明らかにする。とりわけ注目されているのは、1900（明治三十三）年に正式に昇格を主張するまでの渋沢の変化である。

著者は、明治二十年代前半と後半以降とで渋沢の言動に変化が見られると指摘する。前半は主に商工業立国に関する主張であり、後半は商人の道徳教育の推進であるという。渋沢は商業教育に尽力するようになった理由として国家の発展を担う次代の商業者に期待をよせていた点を挙げている。商業者たちが知識技術を獲得しそれを駆使して活動すれば、国が富み人々が豊かになるということから、商業にまつわる知識普及を狙ったのである。著者は渋沢の昇格発言の背景にまずこうした渋沢独自の商工業立国理念を見出している。

他方、道徳教育の推進は商業界そのものの変化に対応する形で強められていったとされる。渋沢は、明治二十年代から三十年代における日本の状況として経済の発展を掲げ、商業界がもはや前時代のそれとは異なるという見解を示していた。すなわち日清戦争を一つの契機として日本では産業革命が進み、企業の勃興が見られるようになったという認識を表明する。だが渋沢はこうした状態を手放しで喜んだわけではなかった。むしろ経済発展に伴って浮上した社会道徳の問題が彼の課題として前面に出るようになったのである。

このように著者は高商の昇格問題を取り上げ、渋沢の商業教育思想の特性を明らかにした。そこでは次の点が指摘されている。すなわち「義」に関連した商工業立国への観念と道徳面における「義」への志向である。著者にとって渋沢の教育理念とは、「義」の土台づくりであり、富国の担い手一人一人に「義」を普及する修身の奨励だったのであり、こうした二つの「義」の共存こそ渋沢の〈義利〉観の反映であった。ここでも著者は、渋沢の一貫した〈義利〉観を浮かび上がらせるのである。

## 5　張謇との比較

著者は渋沢の〈義利〉観を内在的に把握するだけでなく、その歴史的意義について相対化するために中国「近代化の開拓者」張謇を比較の対象に取り上げる。張は渋沢と同時代に活躍した実業家であり、しかも渋沢と同様儒学を習得していた。共に近代化の波に直面し、その中で指導的役割を果たしながら各々の社会を生き抜いた人物という評価がなされている。著者はこうした両者の共通点を前提に比較検討を行っていく。それによって渋沢の『論語』の読み直し、商工業立国主義、商業道徳の確立と次世代への伝達といった様々な思想活動が独自性として改めて浮き彫りにされるのである。

このように著者が中国の実業家を持ち出して渋沢との比較を行ったのは、一口に儒学といってもその内容は受容される時と場、あるいは人によって変化し、多様な性質を帯びるようになるという理解が存したからだと思われる。実際張謇との違いに焦点が当てられると、渋沢の思想・行動が特異なものとして目に映ってくる。本書でとりわけ注視されるのは、日本の儒学受容ではないだろうか。渋沢の『論語』読みに明らかなように、彼の儒学は当時の社会状況に適応する範囲で用いられた。それが江戸時代からの離別につながったとしても問題はなく、むしろ古い悪習を打破する手段として積極的に評価される。かかる傾向は、中国儒学に比すればより柔軟なありようかもしれない。

ところで、こうした両者の違いも重要であるが、それと同時に共通点である彼らの出自・社会的位置づけもまた見逃せない論点であるように思われる。すなわち渋沢の場合は豪農兼村役人の家庭の出身ということであり、張の場合は雇用人を持っている地主のような家柄の生まれで彼自身「郷紳」と呼ばれる身分であったということである。本書では従来の見解にならい、両者をマージナルマンとしてその自由さ、身軽さに関心が向けられている。

日本の近代化における豪農層の役割については既に指摘されているが[6]、日本資本主義の最高指導者とされる渋沢もまたかかる階層に属した人物であり、張がその中国版とも言える郷紳であったことは興味深いことである。渋沢・張のみならず、日本の豪農と中国の郷紳という視点からさらに比較検討を進めていくと、また新たな意味づけが見えてくるのではないか。それは、東アジアの近代化をより明確にするためにも、是非求められるところである。

## 6　おわりに

本書は渋沢栄一の〈義利〉観を軸に彼の思想・行動を考察したものであるが、関心の先はやはり儒学であると言ってよい。しかも見据えているのは、これからの資本主義社会に対する儒学の可能性である。著者は言う。「資本主義の発展に『儒学』自体がいかに役割を果たしたかということよりも、これからいかなる倫理が必要なのか、資本家や経営者が二十一世紀の社会の発展に対していかなる道義性を持つべきか、そうした道徳の再確立に対して儒教思想や儒教倫理がどのように有用にあるか―こうした問いがより重要になってきている」(272頁)。つまり著者の念頭にはこれからの経済にとって必要とされる倫理道徳の問題があり、それに答えるものとして儒学を位置づけようとしているのである。そうした試みは、渋沢の慈善思想や道徳教育への志向を検討する中で達成されたと言えるだろう。著者はこれらを、経済発展に付随した社会問題とそれに対する渋沢の解決という構図で描き出し、かかる渋沢の行為に〈義利〉観があることを指摘した。渋沢が直面した事態は今日にも通じるものであり、我々もまたこれを史的出来事としてのみ解すべきではないだろう。著者が明示する渋沢の活動は、資本主義社会を生きる近代人としての倫理実践であり、「義」の行使という点において儒学的なのである。本書に記される渋沢の行為を通じて、読者である我々もまた資本主義社会に必要な倫理道徳や儒学の可能性に思いを致すべきである。

一方、著者には渋沢以降の状況についてさらなる

考察を望みたい。彼の〈義利〉観は次世代の人々に継承されたのか、されたとすればそれはどのようになされたのか知りたいところである。また著者自身も少し触れているが、儒学思想を経営理念とした渋沢以外の人物についても検討が待たれる。いずれにせよ、著者の研究は我々読者に多様な示唆を投げかけてくる。著者の次なる展開に期待したい。

## 注

1）代表的なものとしては、丸山眞男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、1952年

2）小川健知『渋沢栄一と人倫思想』大明堂、1997年

3）坂本慎一『渋沢栄一の経世済民思想』日本経済評論社、2002年

4）注２前掲書「第八章社会『事業』の思想」249－280頁

5）三好信治「第五章渋沢栄一と東京商科大学」『渋沢栄一と日本商業教育発達史』風間書房、2001年、247－323頁

6）例えば、宮城公子「幕末儒学の視点」『日本史研究』232号、1981年